

船でついた町

小川未明

青空文庫

たいへんに、金かねをもうけることの上手じょうずな男おとこがおりました。人の気きのつかないうちに、安くやす買かつておいて、人気にんきがたつとそれを高くたか売うるといふうでありましたから、金かねがどんどんたまりました。

土地とちでも、品物しなもののでも、この男おとこがこうとにらんだものは、みんなそういうふうにながでたのであります。この男おとこと、こういうことで競争きようそうをしたものは、たいてい負まけてしまいました。そして、この男おとこは、いつかだれ知しらぬものがないほどの大金持おおがねもちとなつたのであります。

ある年とし、たいそう不景気ふけいきがきたときです。あわれな不具者ふぐしやが、この金持かねもちの門もんに立ちました。

「どうぞ、私わたしをご主人しゅじんにあわせてください。私わたしは、もとあなたの会社かいしゃに使つかわれたものです。」といいました。

番頭ばんとうは、しかたなく、これを主人しゅじんに伝つたえました。

「ああそうか、私わたしが出てあおう。」といって、金持かねもちは、玄関げんかんへ出でました。すると、不具者ふぐしやは、

「その後、不幸つづきで、そのうえけがをして、こんなびつこになってしまいました。働くにも、働きようがありません。どうぞ、めぐんでください。」と、訴えました。

金かたまと、だれでも、やさしくなるものです。ことに、この金持ちは、涙もろい性質でありましたから、

「それは、困るだろう。」といって、めぐんでやりました。あわれな男は、喜んで帰ってゆきました。

すると、翌日は、別の不具者がやってきました。

「私は、片腕をなくしました。働くにも働きようがありません。どうぞ、おめぐみください。」と、訴えました。

金持ちは、なるほど、それにちがいないと考えましたから、いくらかめぐんでやりました。

一日に、二人や、三人は、金持ちにとつて、なんでもなかったけれど、いつしか、このうわさがひろまるにつれて、十人、二十人と、毎日金持ちの門の前には、もらいものが黒い山を築きました。

不具者ばかりでない、なかには、働けそうな若者もありました。そういうものには、

金持ちかねもちが、きびしくたしますと、内臓ないぞうに病氣びようきがあつたり、また探さがしても仕事しごとがなかつたり、聞きけば、いろいろ同情どうじようすべき境きようぐう遇あてありまして、一人ひとりに与あたえて、一人ひとりに断ことわるということができなかつたので、しかたなく金持ちかねもちは、みんなに金かねを分わけてやりまし
た。

しかし、限かぎりなく、毎日まいにち毎日まいにち、あわれな人ひとたちがもらいにくるので、金持ちかねもちは、ま
つたくやりきれなくなつてしまいました。

「これは、どうしたらいいだろう、俺おれの力ちからで、困こまつたものをみんな養やしなつてゆくということ
はできない。またそんな理由りゆうもないのだ……。」

こう、金持ちかねもちは考かんがえると、いつそ、みんなを断ことわつてしまつたがよいと思おもいましたから、
翌よく日じつから、門もんの扉とびらを堅かたく閉しめたので、だれも中なかへはいれませんでした。

こうなると、いままで、救すくつてもらつたものが、まつたく食たべられなくなつて、餓死がし
たものもあります。世間せけんでは、急きゆうに、金持ちかねもちの冷淡れいたんを責せめました。新聞しんぶんは、金持ちかねもちに、
なんで、困こまつたものを見捨みすてたかと書かきました。

金持ちかねもちは、とうとういたたまれなくなつて、どこか、人々ひとびとから目めのとどかないところ
へいつて、考かんがえようと思おもつたのです。

彼は、にぎやかな都会から、こつそりと逃げ出して、船に乗りました。そして、できるだけ遠方へゆこうとしました。船の中で、

「や、こんなばかげた話はありません。私が、まちがつていましたらうか？」と、金持ちは、ものわりのしそうな人に話しました。

「ほんとうに困っているのか、どうか、お見分けがつきませんでしたか……。」と、別の人が、口をいれました。

「はじめて顔を見たものに、どうしてそれがわかりましょう？」と、金持ちは、目をまるくしました。

「いや、ごもつともの話です。おそらく、みんなが困っているからでしょう。そして、あなたが、逃げ出しなされるのも道理と思います。ここから、百里ばかりへだたった、A港というところは、ちょうど、あなたのおいでなされるのに、いいところです。」と、ものわりのした人は、教えてくれました。

金持ちは、どこへゆこうというあてもなかったから、A港にゆくことにしました。ある日、船は、その港についたので、金持ちは、上陸しました。

その町は静かな、なんとなく、なつかしい町でありました。気候もよく、住んでいる人

とびと 々の気持ちも平和でいるように見受けられました。

彼は、いろいろのところへ旅行もしましたが、こんないいところは、はじめてでした。いいところをあの人は教えてくれたと感謝しました。

町のようすは、たいして変わってはいなかったが、たいへんに、気持ちがいいのでした。「どうして、この土地は、こう平和なんだろうな。」と、歩きながら考えました。

あちらから、人のよさそうな、おじいさんがやってきましたから、金持ちちは、近寄って、「たいへん、あなたたちは、ゆつたりとしていられますが、氣候がいいからでしょうか。

それとも金があつて、豊かなためでしょうか？」と、問いました。

すると、おじいさんは笑つて、

「いいえ、まだ、この土地が開けないからです。それに、そう欲の深いものがないからです。だんだんこの港に、船がたくさんはいつてきて、方々の人々が入り出るようになりますと、町もにぎやかになりますかわり、暮らしぶらくなりますよ。なかには、そのなるのを望むものもありますが、私たちは、かくべつ繁昌しなくとも、いつまでも平和に暮らしてゆくのを望んでいます。」と、答えました。

金持ちは、不思議に思いました。

「繁昌はんじやうすると、平和へいわにならないというのは、どういうわけですか？」と、またたずねました。老人ろうじんはあいかわらず笑わらつて、

「同じいような店みせが、いくつもできるようになります。そして、それらが、みんなよくやつていくには、たがいに競争きやうそうしなければなりません。いまは、日ひが暮くれれば、じきに休みやすますが、そうなれば、夜よるもおそくまで働はたらいたり、起きていなければなりません。」といいました。

彼かれは、なるほど、それにちがいないと思いました。

「いつまでも、静しずかな平和な町まちであれ。」と、金持ちかねもちは、心こころの中で祈いのつて、おじいさんと別わかれて、あちらへ歩いてゆきました。小ちいさな町まちがつきると、丘おかがありました。彼かれは、丘おかへ上あがりました。

ここには冬ふゆもなく、うららかな太陽たいようは、海うみを、町まちを、照てらしていました。すこし上あがると、ばらの花はなが咲さいていて、緑みどり色の草くさが、いきいきとはえていました。

金持ちかねもちは、草くさの上に腰こしをおろして、たばこをすいながら、絵えに描かいたような、あたりの景色けしきにうつとりと見みとれたのです。

「あのおじいさんのいったことは、ほんとうだ。無益むえきな欲よくが、かえつて人間にんげんを不幸ふこうにす

るのだ。そして、欲深よくふかになつたものは、もう二度と、生まれたときのような、美しい気き
 持もちにはなれないのだ。だれとも争あらそわず、仲なかよく暮くらしてゆくのが、本意ほんいなんだ。この世よ
 の中なかが、まちがつていることに気づきかなかつたばかりに、俺おれも、いつしか欲深よくふかい人間にんげん
 になつてしまった。この町まちの人々ひとびとのような平和へいわな生活せいかつがうらやましい……。―
 頭あたまの上うえの木きのこずえには、美しい小鳥ことりが、しきりに鳴ないていました。彼は、なにを考かんがえ
 るということもなく、夢ゆめを見みるような気持きもちで、小鳥ことりの唄うたにききいていました。
 そこには、金持かねもちもなく、貧乏びんぼう人もなく、ただ、美しい世界せかいがあるばかりでした。

青空文庫情報

底本：「定本小川未明童話全集 6」講談社

1977（昭和52）年4月10日第1刷

底本の親本：「未明童話集 4」丸善

1930（昭和5）年7月

初出：「国民新聞」

1930（昭和5）年1月1日

※表題は底本では、「船《ふね》でついた町《まち》」となっています。

入力：特定非営利活動法人はるかぜ

校正：栗田美恵子

2019年2月22日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（<https://www.aozora.gr.jp/>）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

船でついた町

小川未明

2020年 7月18日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>